

要であるが、本書はそんなに大上段に振りかぶることなく、身近な地衣類を紹介しながら、地衣類の基本的な特徴を解説し、地衣類に親しみが持てるように工夫されている。初心者が野外観察に携行すれば、採集した地衣の特徴を詳細に観察するための手引書としても利用できる。とは言いながら、学問的な内容はしっかりしており、地衣類の形態的な特性や、地衣成分の調べ方なども簡略に説明されている。また、第6章地衣類とヒトのかかわりは、著者が辿ってきた研究の裏話も含まれ、気楽な読み物となっている。地衣類がこんなにも彩り豊かであったかと、いまさらのように思い直させる一冊である。

煩わしさを避けるために、写真にスケールが与えられていない。背景に写っている木の枝や、顕花植物の花などから、地衣類の大きさを推察できるものもあるが、拡大写真、例えばクロモジゴケ、オオニクイボゴケ、センニンゴケの裸子器などは、実際の大きさを類推する何かの手がかりが欲しいように思われる。(黒川 道)

□ 邑田 仁 (監修), 米倉浩司 (著): **高等植物分類表**. 北隆館. 2009. 190 pp. ¥2381+ 税. ISBN: 978-4-8326-0838-2 C3045.

地球上の生物種は10%程度しか知られているに過ぎないと予測されている。したがって、現在の生物分類体系は不完全にしか知られていない生物種を対象として体系化したものであるといってもよいだろう。高等植物では約25万種が知られており、30~50万種の未記載種が生存しているとする予想がある。また種子植物の推定現存数42万種あまりという2001年の推定値と比較して、2020年頃には80万種が記録されると予測したことがある(大橋広好2002. 分類学私考. 分類2: 72)。これらの前提に立っても、現在知られている範囲の生物種を、現段階で最も合理的に体系化し、生物界の情報を整理できる枠組みを作ること分類学の重要な役割の一つである。

分類体系作成の基準も形の類似に始まり、現在はDNA上の特定領域の塩基配列を比較して既知の系統関係の補強あるいは改変が進行している。将来は系統推定のためのより一層効果的な手法が開発される可能性もあろう。

この度刊行された邑田・米倉:「高等植物分類表」は現段階でのAPG分類体系を日本植物に適用したもので、現在も改良が進行中の体系である。

1968年に出版された伊藤 洋先生の「新高等植物分類表」を約40年ぶりに改訂したもので、「伊藤新分類表」は新エングラールの分類体系を日本に紹介して、その体系の普及に大いに効果があった。内容の簡潔さはもとより利用しやすい新書判であることの手軽さもあり、手元に置いて便利に使ってきた。今度の「邑田・米倉分類表」はAPG分類体系紹介の初めてのもので、その普及に役立つだろうし、前書と同じく新書判であり、厚さもほぼ同じ(前書は130ページであったが、本書ではページ数が増えたにもかかわらず、紙が薄くなり、紙質が格段によくなっている)であるから、大変に使いやすそうである。本書の主体はAPG体系の一覧表で、この新分類体系の説明とエングラールやクロンキストの分類体系との相違点についての解説がある。それに加えて新旧分類体系対照表が2種類付けられていて、「伊藤新分類表」あるいはクロンキストの分類体系とAPG体系とが対照されている。APG体系とエングラールやクロンキストの分類体系の関連が分かりやすいように工夫されている。

属レベルの分類表はYListのもので、APG分類体系ではない。属の扱いをMabberley's Plant Book 3rd ed. (2008)と比べると、Mabberleyで1属とされる*Prunus*は本書では細分されている点などに違いがある。「伊藤新分類表」と比べてみて一番便利になったことは、沖縄の属が加えられかつ本土の属が網羅されたことである。また、日本でみられる帰化あるいは栽培種の属も大幅に加えられている。属の和名が入られたことは便利だし、属名がイタリック表示に変更されたことは大変見やすくなった。小冊子ながら内容の充実した便利な出版物であり、広く推薦したい。

(追記) 本書の約一ヶ月後に、大場秀章「植物分類表」(アポック社)が刊行された。大場分類表は表題を植物分類表としているが、その内容は維管束植物に限られたもので、邑田・米倉の高等植物分類表と同じ範囲の植物を対象としている。しかし、邑田・米倉分類表はHaston et al. (種子植物) およびSmith et al. (シダ植物) の体系で、大場分類表はMabberley's Plant Book ed. 3の体系で、両体系とも2003年のAPGIIを改良したものであるが、内容は相当に異なっている。したがって、類書と言えども両分類表は異なっていることを理解しておきたい。両書を相補的に使うと分類体系上の問題点が浮かんでくる。(大橋広好)